

DAISY とは

1. 本来は情報システムの呼び名

昔の録音図書はレコード盤や録音テープなどのアナログデータだった。1冊の本を音声化するには何巻もの録音テープを必要とする。また、紙の本のように目次や索引から目的の部分に飛ぶこともままならない。1980年代後半、「ハンディキャップのある人も自由自在に読書できるように、録音図書をデジタル化してコンピュータで操作できるようにしよう」という動きが、世界各国で起こり始めていた。

その中で1988年に、スウェーデン政府が運営する Talboks- och punktskriftsbiblioteket (TPB, 録音図書・点字図書の図書館) が、**Digital Audio-based Information SYstem** (DAISY, デジタルな音声を基盤とする情報システム) を開発するプロジェクトを立ち上げた。

情報システムというのは、情報と、それを処理するコンピュータと、それを利用する人間とを関連付ける体系である。DAISY プロジェクトは、コンピュータで扱える形式で録音図書を保存し、コンピュータを使って、利用者が自由自在に録音図書の中の情報にアクセスできるようにするシステムを構築することを目指していた。

2. DAISY 規格

DAISY のような情報システムの開発はスウェーデン以外でも関心を持たれていた。文献の相互利用をする可能性を考えれば、各国で独自の情報システムを開発するよりも、DAISY に使われる技術の工業規格を作り、それを世界共通で利用できるようにするほうが良い。

そのため、1996年5月、DAISY Consortium という国際機関が設立され、DAISY の考えに基づく新しい工業規格の開発が始まった。その規格の呼び名も DAISY となった。

当初開発していたのは録音図書の形式についての規格だったが、2001年2月に勧告した規格 DAISY 2.02 とそれ以降の版では、仕様の中に録音図書以外の電子書籍の形式を含む。日本では、仕様に書かれた6種類の形式のうち、セクションの階層構造が付いた音声データからなる形式を「音声デイジー」、音声と文字の両方のデータからなる形式を「マルチメディアデイジー」、文字データからなる形式

を「テキストデイジー」と呼んでいる。文字データがある形式なら、点字ディスプレイで表示することも可能である。

このように、2001年以降の DAISY は “Audio-based” 「音声を基盤とする」という表現に収まりきらない情報システムになってきたので、DAISY Consortium の2001年11月の会議で、DAISY の正式名称を **Digital Accessible Information SYstem** に変更することが決まった。

3. DAISY の未来

その後、書籍の作成側と利用側とで必要な機能が異なることから、両方の機能を合わせ持つ仕様を開発するのは困難であると認識されるようになり、2009年6月以降は以下の2つのフレームワークに分けて開発されることになった。

- A. いろいろな利用者のニーズに合わせて録音図書・点字図書・印刷本など様々な形式に変換する元になる、書籍の作成・図書館間の相互交換用のフレームワーク
- B. 利用者のニーズに合わせて変換した後の、配布用のフレームワーク

さらに2010年10月の役員会では、ほかの機関が開発していた電子書籍の規格 EPUB 3 (2011年10月に正式に勧告) が B に相当すると結論付けられ、B の開発をやめた。

A については、2012年7月にアメリカ国内の情報規格機構と共同で、その規格 ANSI/NISO Z39.98 (通称 ZedAI) の初版を勧告している。

各図書館は、ZedAI に従う図書を作成・保管しておけば、必要に応じて録音図書や点字図書などに変換して配布できる。図書館間で書籍の相互利用をするためには、ZedAI に従うデータを送信し、それを受け取った図書館が利用者にとって最適な配布データに変換すれば良い。

さらに、出版社が始めから ZedAI に従って書籍を作成すれば、印刷本のほか、電子書籍、オーディオブック、点字図書など、多様な形態の書籍データを1つのフレームワークの中で実現できる。それを市場に出すことに成功すれば、より多くの人々がボランティアに頼らずに自由に本を読めるようになる。これは DAISY によって実現できる理想の未来と言えるだろう。